とある科学の結標淡希？

Sun

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある科学の結標淡希？

【Ｎコード】
Ｎ１６４２Ｌ

【作者名】
Ｓｕｎ

【あらすじ】
転生か憑依わからないが姿も能力も結標淡希そっくりになった少年、これだけなら憑依なのだが性別は男ままで、過去の記憶もある。そんな少年が学園都市で原作に介入するお話。

※本作品は「Ａｒｃａｄｉａ」様にも投稿させて頂いております。

（「Ａｒｃａｄｉａ」様ではＳｕｎではなくＭｏｏｎという名前で投稿しています）

はじめに

はじめまして今回とある科学の座標移動というＳＳ物を書かせていただきます。Ｍｏｏｎと言います。

・この作品は魔術、物理法則などが怪しい部分もありますが、ご了承ください。
・独自の設定などもあります。
・タイトルがとある科学なのは主人公が能力者というだけでとある魔術方面にもかかわっていきます。
・転生・憑依があります。
・オリジナルキャラが出てきます。
・原作と設定が異なる場合があります。
・ＴＳがあります。だって主人公が女だと書けない気がしたからです。

以上、注意書きを考慮の上、御趣味に合致せぬようでしたら御観覧をお控えください。

※本作品は「Ａｒｃａｄｉａ」様にも投稿させて頂いております。（「Ａｒｃａｄｉａ」様ではＳｕｎではなくＭｏｏｎという名前で投稿しています）

とある科学の結標淡希？　第一話

「は～」

ため息が漏れる。この生活にも慣れたが思い返しても今後を考えてもため息が出る。

行き成りだが僕は現実の世界からとある魔術の禁書目録の世界（まあここも今は現実の世界なんだが）に転生あるいは憑依してしまった。転生か憑依の理由は自分の感覚としては忘れていた記憶を取り戻したといった感じだがはじめから記憶があったわけではないので憑依で憑依もとの記憶があるという可能性もあるからだ。

遅くなったが僕の名前は結標淡希だ。うん、原作登場キャラだ。あっこれも憑依では？　と思う理由なのだが名前は原作と同じなのに男だ。精神の影響で男になった？　いやいやどんな原理よ。それで悩んだが他の世界への移動があるならこれもありかと考えることをやめた。それにしてもこれはありがたかった。だって行き成り女になっても生活が困るもん、それに下手したら自分の体に欲情するかもしれないし・・・・・かなりの変態だねそれ、本当に男でよかった。あ、あと都合のいいことに主人公と同い年だ。

それにしても顔は女だがまあいい、問題は僕の能力は『座標移動（ムーブポイント）』これで原作と同じ人物だと分かった（顔も殆ど同じだし）。つまりこのまま良くとグループ・・・・・・これは大丈夫だろう。僕は問題を起こすつもりはない・・・・・・いや原作には介入したいから問題を起こさない訳じゃないか、けど反逆しなかったら問題ない。問題なのは窓のないビルへの案内人だ。これは避けるために高校はエリート校の勧誘を断り一般の学校に行ったのだが、まあ定期的に実験で研究所に出向くんだが。

だって原作でも狙われてたじゃん案内人、結局なっちゃったけど、もっとも本当に運ぶだけだが、周りには統括理事長に来客を運ぶだけと思ってると思わせてる（ばれてるかもしれないけど）。その活動の一環で土御門にお前理事長と知り合いなの？　と聞くと知り合いなんだにゃーと答えてきた他の人には聞かないほうがいいにゃーという忠告つきで、

まあ駄目元で言ってみた樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）で私の能力演算の最適化を演算させることというとやってくれた。おかげで僕の能力発動は他のもともと早かったが今では空間移動系能力者と比べると異様に早い。ほぼ瞬時に使えるくらいに、まあもともと演算能力は一方通行並みだったらしいけど。転生特典だろうか？

まあ、あくまで最適化だけでどうすればさらに能力が高まるかは教えてもらえなかったが（無いのか、あっても一方通行みたいな実験で私が引き受けないのを分かっていたのか、はたまた他の理由があるのか）まあ、ツリーダイアグラムを使えなんていったら向こうからあきらめるだろうと思っていったらＯＫが出たから食いついちゃったんだけど、

もう気づいたものも居るかもしれないが私はレベル５だ。原作と違ってトラウマがなく原作よりも能力が高いからだろう、ちなみに

第三位だ。一位と二位以外は一つ下がってる。私的には空間移動能力が最強だと思うんだが何かあるのだろう。一位、二位は特殊な能力だし、特に翼が。私も強力だけどＳＳものに良くある特殊な能力じゃないし、まっ一位には脳に直接物を移動して殺すとか出来ないんだろうね。だってそれが可能なら最強じゃないだろうし、第二位は能力でなんかの法則変えて防ぎそうだし、実際特殊だよね。上位二人は、

今は演算速度を上げたりと地味に能力の向上を目指している。研究者の連中はこれ以上行くなら点ではなく面で入れ替えるとか、魔法みたいに空間をつなげたり、空間を操るしかないと言っている。つまり移動距離と重量以外は最高の状態ということだ・・・・・・やってみようかな？

「は～」

きついね。今後を考えると能力以外にも体を鍛えてるけどね。能力や魔術に比べるとすずめの涙、

「何ため息ついてるんだよ。結標」

「・・・・・・は～」

今僕に話しかけたのは原作主人公こと上条当麻だ。なんてお気楽な自分に訪れる運命も知らずに、そうそう僕の通う高校は主人公と同じ高校だ。無論探して入ったんだけどね。楽だったよ探すの、子供先生探せばよかっただけだし、

「気にしなくて良いよ」

今日も僕はこの学園都市で原作が始まるのを待ちながら第二の人

生を生きている。

とある科学の結標淡希？　第二話

ある日家への帰り道、
余談だけど僕は寮には住んでない。個人でマンションを借りて住んでる。

「小腹がすいたね」

なにか食べ物を売ってないかと思って周囲を見るとクレープ屋があった。

「なんかあった気がするけどまっいいか」

クレープ屋の列に並んで少しすると後ろから話しかけられた。

「あら、結標さんじゃありませんか」
「ん？」

後ろを振り向くと四人の少女が居た。全員知っている人物だった。
もっとも知識以外で知っているのは二人だけだが、

「やあ久しぶり。花頭、囲碁」

「花頭じゃないですよ～」
「白井黒子ですの！」

いやいやだって見た感じから花頭だし白と黒とか囲碁かオセロかチェスだろ、チェスは黒白以外にもあるけど、

「誰？　黒子」
「あ、こちらは結標淡希ですの」
「へ～、あの」
「で、そちらの二人は」
「御坂美琴」
「佐天涙子で～す。何か成り行きで一緒になりました。ちなみに能力値はレベル０で～す」
「さ、佐天さん」
「僕は結標淡希、よろしくね。あっ一応第三位」
「へ？」

佐天は能力なんて別にいいという感じで嫌味なく尽きたされたことに驚いた。

「あっ、そうそうレベルなんか気にしなくて良いよ。僕の知り合いにレベル０なのにレベル５に勝つ人が居るもん」
「「「うそ！」」」
「本当だよ。ねえ負け続けてる。御坂さん」
「うっさいわね」
「お姉さまに勝つなんて本当にレベル０なんですの」
「そうだよ」

その後も少し話していると順番が回ってきた。

「ご注文をどうぞ」
「ブルーベリー」

少ししてクレープが出来上がり貰うとそれ以外にも何かを渡してきた。

「なにこれ？」

「先着１００様に配っているゲコ太ストラップです。ちなみに最後の一個になります」

「ふ～ん」

そういって列を外れるとなぜかこの世の終わりのような顔をした御坂が居た。

「おい」

「・・・・・・」

（返事がない。ただの屍のようだ・・・・・・ってそういえばこんなイベントも有ったね）

「欲しいの？」

言うと御坂が勢いよく顔を上げた。

「べ、別に欲しいわけじゃないわよ」

「そうなの」

そこで私は面白いことを考え付いた。

「じゃあ、飛んでけー！」

私はゲコ太ストラップを投げた。

「げ、ゲコ太―！」

御坂は必死に走りながらとりに行った。それを確認するとまだ視認できるところで能力を使いストラップを手元に戻した。

「！？」

行き成り消えたことに御坂が驚きあたりを見回しストラップの輪に指を入れてまわしている僕に気がついた。

「あ、あんたね～！」

「くくく、言いじゃんあげるんだし」

僕は言うと御坂にストラップを渡した。

「い、今の何の能力ですか？」

「うん？　ああ、『座標移動』だよ」

「『座標移動』？」

「結標さんは空間移動能力者の頂点で他の空間移動能力者と違い触らずに移動させられますの」

「へ～」

「あれ？　何であそこ昼間からシャッターが閉まってるんでしょうか？」

行き成り初春がそんなことを言い始めた。

「あ、本当だ」

言った瞬間にシャッターが爆発した。

「「「「！？」」」」

中からは強盗と思われる人物が出てきた。
「！　初春は警備員に連絡して非難誘導を」
言うと白井は犯人の確保に向かった。
「そういえばアンタなんで黒子と初春さんと知り合いなのよ」
「ああ、なんか敵を排除して風紀委員に届けてたら知り合いに」
「・・・・・・なんか言われたことある？」
「特に何も」
「何で私にだけ文句言うのよ！」
御坂は自分は文句を言われるのに結標が言われないことに腹を立てたようだ。
「アレじゃない？　僕は襲われるけどお前は襲うから」
「・・・・・・なんでアンタはそんなに襲われるのよ」
「う～ん、二つの意見があるんだけど、一つ目クラスメイト達曰く私は一番浸し見やすいレベル５なんだって」
「まあ、普通の学校に通ってるしね」
「二つ目スキルアウト達曰くレベル５のくせに俺らでも通える学校に通うなんて舐めてんのか？　だって」
「なるほどね～」
すぐ近くで銀行強盗が起きているというのになんとも余裕なレベル５二人だった。
「どけ！」
「「おっと」」

銀行強盗の一人が逃げる最中に二人にぶつかった。

「バカよね黒子から逃げられるわけないの・・・・・・に」

「まったくだ・・・・・・ね」

その時二人は気がついたぶつかった時クレープを落としていたことに、

「黒子」

「はい！」

「これは私が個人的に売られたけんかだから手出すわよ」

「ふふふ、まちな俺がやる」

言うと僕は能力で銀行強盗を目の前に転移させ蹴り飛ばした。

余談だが主人公は転生前口調をていねいにするように言われていたので基本ていねいだが時折崩れる。

「な！？」

さらに地面に拘束するように持ち歩いている。白井と似た棒とワインの栓抜きを転移させた。

余談だが僕が持ち歩いてるのは鉄の棒十本、栓抜き五本、ダーツ十本、その他文房具だ。初めは栓抜きとダーツだったのだが体内に転移させると中がずたずたになるので鉄の棒も持ち歩きその時点では各種十五本以上持ち歩いていたのだが学校の警備員、あれだ盾で戦う有名な人に「そんなに持ち歩いてたら流石にますいじゃん」って言われたので某物語の文房具を大量に持ち歩いてた某人物をまね文房具も場合によっては武器することにしたのだ。

「さて、抵抗するなら次は体内だ」

言うと後ろで大きな音がした。どうやら私に白井が集中してた時に一人が逃げ出そうとしてそれを御坂が超電磁砲で撃退したようだ。

「学園都市第三位の『座標移動』に第四位の『超電磁砲』」

「そうですの」

なんか白子が語ってる。その後御坂に抱きつき御坂がなんか悟ったことを言った。

「今日も平和だね」

そう思いながら一日が終わった。

とある科学の結標淡希？　第三話（前書き）

最後が終わり方がおかしいです。

僕は道を歩いていただけのに。

「は～」

まあ、近道だからって路地裏歩く僕も悪いんですけどね。転移すればもっと早いのに、それでも

「バカばっか」

今私はスキルアウトと思われる人物たち五名に囲まれている。無駄なのに、とりあえず襲い掛かってきたから『座標移動』で全員の頭を下にして地面すれすれに転移させた。

「はい、終わり」

五名全員が伸びているのを確認すると風紀委員に連絡してその場を去った。

「上条」

「な、何だよ」

「自首しよう」
「ち、違う！」
「とりあえず、土御門と青髪には連絡しておくよ」
「不幸だ！」

スキルアウトを片付けて少し歩いていると少女というよりも幼女におにいちゃんと呼ばれている上条に会ったのだ。

「まさか上条までロリコンだったとは思いませんでした」
「違う！　この子が服を買いに行きたいんだけどわかんないっていうから案内してるだけだ」
「ふ～ん」

そういえば超電磁砲の方でありましたね。なんだっけ？

「なら、僕もついていきます」
「その心は？」
「私はレディース物も着るから」

そう、私は結標淡希の性別が男になっただけで体型まではほとんど変わってないのだ。

「じゃあ、いくか」
「うん！」
「そうだね」

余談だが髪型も原作通りだ。だってこれが一番しっくり来るし、

「で、お前は御坂さんに絡まれると、運命かね？」
「不幸だ」

出かけた先の服屋、セブンスミストに言ったら御坂が居たのだ。セブンスミスト、七の霧？　まあ、とりあえず思い出した。あの爆発する事件だ。

（どうしようかな？　まあ僕が居るせいでイレギュラーが起きたら全員店の外に転移させれば良いし、その前に爆弾を上条のところに転移させる手もあるか、めんどくさいし爆弾を転移させればいいか）

「逃げてください！！　あれは爆弾ですっ！！！」

声を聞いて御坂がレールガンを撃とうするが失敗した。

私は反射的に二人を自分近くに移動させた。

「上条！」
「わかってる！」

本当は私の能力で地下や空飛ばしても良いんだけど何か飛ばした周囲にあって壊したら嫌だから上条にまかせた。

あの後御坂が犯人を捕まえに行ったが私は着いて行かなかった。詳しくは覚えていないがなんか努力してどうたらこうたらと少し良い事を言ってたと思うから居ないほうが良いだろうと思い着いて行かなかった。

だって憑依の場合は論外として転生だとしてもすぐにレベル４、少し訓練してすぐにレベル５になった私は言う資格がないだろう。

もちろん努力してないわけじゃない。制御、更なる能力の向上の為努力してるがこれは違うだろう。

まあレベル５に努力だけで慣れる分けないから結局のところ御坂には才能があったんだろうが一時期でも低能力者だった御坂だから言葉に実感があるんだろう。

とある科学の結標淡希？　第四話

さて、昨日の夜雷が落ちたのでおそらくついにインデックスが来たのだろう。しかし確かめに行く理由がないから確認しにはいかない。まあ、今は「ツリーダイアグラム」が壊れてないから天気予報の的中率は１００パーセントだ。だから昨日御坂と上条が戦ったのだろう。何より記憶が正しきれば日にちがあってるし、今日ステイル・マグヌス？　と戦った後に会いに行こう。

そんなことを考えながら歩いていると初春と佐天がファミレスの窓に張り付いていた。

「・・・・・・何してるの？」

「私は木山春生、大脳生理学を研究している。

「佐天涙子で～す」

「初春飾利です」

「どうもはじめまして結標淡希です」

「ムスジメ・・・・・・君が第三位の、まさか一日で二人もレベル５に会うとはね」

「けど、脳の学者さんなんですかー

なぜそのような方とお茶を白井さんの脳に何か問題でも？」
「ぷっ」
思わず笑ってしまうと白井が睨んできた。けど白井が考えてることとか行動とかには問題があるだろ。御坂が訴えればまず間違いなく勝てるな。
「『レベルアッパー』の件で相談してましたの」
そういえばあったねそんなの、
「『レベルアッパー』ですか？」
「ええ」
「それなら私――」
佐天が持っているとでも言おうとしたんだろうけど回収するという話になったら黙っていしまって飲み物をこぼしてしまった。
「す、すいませんッ」
「いや、気にしなくていい。かかったのはストッキングだけだから脱いでしまえば・・・」
「ブッ！？」
木山先生が何を思ったか脱ぎ始めた。
（ああ、この人が都市伝説の脱げ女か）
「だ――か――ら――人前で脱いじゃだめといってますでしょーが！！　ここに殿方もいますのよ！」
白井が結標をびしっと差しながら叫んだ。

「しかし、起状に乏しい私の裸体を見て劣情を催す男性がいるとは・・・」
「趣味嗜好は人それぞれですのっ、それに殿方で無くてもゆがんだ情欲を抱く同性もいますのよ！」
「女の人が公の場でパンツが見えるようなことをしちゃダメですっ！」
「「・・・・・・」」
「なあ」
「なによ？」
「あの二人が言ってる言葉をそのままあの二人に言ってあげたいのは僕だけか？」
「・・・・・・言わなかっただけよ」
「・・・・・・そうですよ」

話が終わると上条たちが住んでいる寮に向かった。
寮に行くと消防車が止まっていた。

「上条手を貸そうか？」
「結標！？」
「けがしてるね。ああ、魔術があるのは知ってるからそこらへんの説明はいいから」

「あ、ああわかった。けど、魔術使える人が・・・・・・」
「なら青髪に電話して」
「なんで青髪なんだよ！」
「上条、確かにここは学生の街だけど学生だけでなりたてる訳じゃない」
「そうか！」
「そういうこと、青髪なら小萌先生の住所知ってるでしょ」
「ああ！」

「失礼します！」

私は小萌先生の家に着くとドアを転移させて無理あり入っていた。

「な、なんですか！？　って結標ちゃん。まさか泥棒さんになったんですか？　だめですよ！　先生そんなの許しませんからね！！」
「先生、違いますから、そんなことより上条が背をってるのを見てください」
「上条ちゃんもいるんですか？　ってぎゃああ！？」
「今気づいたんかよ！」

その後インデックスが魔術の説明をして今私と上条は外に出ていた。

「くそ！」
「上条、気にするなとは言いませんがが先を考えろ。学園都市に最近入った魔術師は二人です」
「・・・・・・なんで知ってんだよ」
「ここだけの話ですけど僕は案内人と言って統括理事長の下に案内する仕事をしてるんです」
「じゃあ、たまに公欠席で休むのは」
「仕事ですね。そんなわけで学園都市のトップに近いから本当に少しなら知ってるんです」
「そうか」
「今日は帰りますけど何かあったら連絡をください。力になります」

これは本音だ。原作介入とかを除いても上条は友人だから助けるのもやぶさかではない。

「けど、相手は魔術師だぞ」
「私はレベル５の空間移動能力者ですよ。なにかを足や手に直接移動させたり、殺す気ならあたまに移動させればいけると思うよ。もちろん殺す気はありませんが、それに・・・・・・」
「それになんだ？」
「私は空間移動能力者のトップ、つまり移動が速いです。最悪の場合はどうとでもにげれるよ」
「・・・・・・悪いな」
「いえ、では気を付けてくださいね。一応人目のあるところではしかけないと思いますけど」
「ああ、わかった」
「では」

言うと結標は空間移動で消えた。

「そういえば先生ちのドアどうすればいいんだ？」

とある科学の結標淡希？　第五話

あれから数日たった確か今日あたりまた上条が魔術師に襲われるだろう。それはいい、いや、よくはないが問題はあと数日以内に上条が記憶を失うということだ。上条は友人だ。その友人が記憶を失うのは止めたい。そんなことを考えていると電話がかかってきた。

「もしもし」
「『大変ですの！？』
「何があったの？」
『その幻想御手ですわ！　犯人が分かりました。犯人は木山先生でしたの！』

（てことは確か今日だね上条が襲われるの）

「あの先生がね～」
『いいから早く確保に向かってくださいですの！』
「いやいや、私一般人だよ」
『そんなこと言ってる場合じゃありませんの！　木山先生は複数の能力を使ってますの！　お姉さまも向かいましたからあなたも言ってください！』
「・・・・・・座標は？」
『メールで送りましたわ！』
「わかった」

僕は電話を切るとすぐに空間移動でその場所に向かった。

「さぁ、何が出てくる」

（ああ、確かこんなのも出たな～）

私は今目の前の状況を見て半ば現実逃避ぎみに考えていた。

（確かＡＩＭ拡散力場の集合体だっけ？）

「あんたなんでいるのよ！」

結標が考えていると御坂が話しかけてきた。

「白井に頼まれたんッ！？」

僕は攻撃が来たので御坂ごと空間移動で避けた。

「いったん退きます！」

「無理よ！」

「なんで！」

「後ろにある建物原子力実験炉なのよ！」

「は！？」

「だからあんたの能力であれ移動させなさいよ！」

聞くと結標は転移させようとしたができなかった。

「無理！」

「なんで！」
「あれってＡＩＭ拡散力場の集合体でしょ？　空間移動能力者は同じ空間移動能力者を転移させられない。確か同じ拡散力場が邪魔するとか」
「だから！？」
「レベルアッパーの使用者の中には同じ空間移動能力者がいてそのせいで転移させられない！」

説明中も二人は結標の能力で攻撃を避け、御坂の能力で攻撃をしていた。

「「！」」

二人が避けると、攻撃を繰り返して少し経つと再生が鈍くなった。

「チャンス！」

御坂は今まで以上の電撃を加えてＡＩＭバーストを黒こげにした。

「ふ～」
「あほ！　まだ終わってない！」
「そうだ！」

二人が言うと黒こげになったはずのＡＩＭバーストが動き出した。

「ちょ・・・！？　何であれくらって動けるのよっ」
「あれはＡＩＭ拡散力場の塊だ。普通の生命の常識は通じない。体表にいくらダメージを与えても本質には影響しないんだ」
「そんなのどうしろって言うのよっ！？」
「力場の塊を自立させている核のようなものがあるはずだ。

それを破壊できれば」

（核か・・・・・・いけるか？）

「退がって、巻き込まれるよ」

「構わない。アレを生み出した責任がある。私はどうなっても・・・・・・」

「アンタはよくても教え子達はどうするのよ」

「ッ・・・・・・」

「あと、巻き込むってのは私たちが巻き込んじゃうって言ってるのよ」

御坂は電撃を放ちながら言った。しかし電撃はそれてしまった。

「生みの親と同じで面倒なことしてくれるわね」

「御坂」

「なによ」

「私が能力をほかのことに使わせるからその間に電撃放って核を確認して」

「なにするのよ」

「簡単だよ。私の能力の一度に飛ばせる距離は２０００メートル、最大重量は１１３００キログラム、まあ２５００キログラム以上はしないんだけど、さて周囲の物質計約２４００キログラム防げるかな？」

言うと結標は能力で周囲の岩や橋など計約２４００キログラムをＡＩＭバーストの上に落とした。当然ＡＩＭバスとも能力で防いだが結標の攻撃はそれだけでは終わらなかった。

「だれが一回って言ったけ！」

結標は言った。２５００キログラム以上はしないとつまりそれ以上は身体の負担が大きいということだ。そこで結標の選んだ方法は負担の大きくならない範囲以内で連続で転移させることで負担を軽くしたのだ。

２，３回繰り返すとＡＩＭバーストは支えきれなくなったようだ。

「御坂！」

「わかってるわよ！」

言うと御坂は大量の電気を放った。すると吹き飛ばされたところに物体があった。

（アレが核か）

「ＡＴＭ拡散力場の集合体・・・・・か、悪いけど『自分だけの現実』を他人にゆだねる人たちに負ける気はしないわ。

こんなところで苦しんでないでとっとと帰んなさい」

言うと御坂は超電磁砲を放ち核を破壊した。

「終わったか」

言うとなぜか御坂が倒れた。

「ど・・・・・どうしたんだ」

「電池切れ・・・・・」

「なさけない」

「うるさいわね」

その後は木山先生が御坂に「妹達」のことを意味することを言ったり、白井や警備員が来て終わった。

「疲れた～、後は今日の夜か」

私は夜に備えて帰って仮眠をとった。

とある科学の結標淡希？　第五話（後書き）

相変わらずの駄文ですいません。
能力の増加は演算能力が一方通行並みなのとツリーダイアグラムで能力の演算が最適かされているので２．５倍にしました。

とある科学の結標淡希？　第六話

夜になった小萌先生の家に電話すると銭湯に出かけたと聞いて今銭湯までの道を一定間隔で飛びながら移動している。

（うん？）

僕は違和感を感じだ。

（ここを通りたくない

・・・・・魔術の人払いか、気づいた理由は人払いを知っていたことから違和感と結びつけられたからかな）

結標は転移した。

移動していると上条より先にインデックスを見つけた。確かステイル・マグヌス？　に追われているようだ。

（見た以上こっちも助けるか）

僕はインデックスの前に転移した。

「やあ、久しぶり」
「「！？」」

インデックスとステイルはいきなり結標が現れたことに驚いた。

「誰だ！？」
「時間がないから眠ってね」

言うと結標はステイルを転移させた。転移先はステイルがいた場所の上で向きがさかさまになっていた。

「な！？」

ごんっ！
そんな音とともにステイルは気を失った。

「ふ～、終わりっと、大丈夫」
「う、うん。え～と確か当麻と一緒に運んでくれた人？」
「そう、とりあえず上条も助けにいくから先に家に帰ろうね」
「・・・・・・わかった。当麻をよろしくね」
「うん」

結標は答えるとインデックスを転移で小萌の家まで送った。

インデックスを送り届けて上条を捜し、見つけると神裂が切れたところだった。

（くそっ、こうなる前に介入したかったのに）

切れている神裂とは戦いたくないがこの後友人がぼこぼこにされるとわかっていているのに放置もできない。

結標は神裂が上空に飛び上がったところを転移させた。その際に事前に書いたメモを上条の前に転移させて、メモの内容は「こいつの相手は僕がやります。上条はインデックスを守っていてください。一応小萌先生の家に送りました。」だ。

（これで最悪の場合は逃げると伝えている以上上インデックスのもとに言ってくれるでしょう。僕の影響でステイル・マグヌス？　が小萌先生の家に乗り込んだら困りますからね）

そんなことを結標が考えていると先ほどの場所から人目に付かない場所の上空十メートルに転移させられた神裂が着地して問い出してきた。

「何者ですか？」

（上条がいなくなったから多少はましになったかな？）

「何者と言われましても学園都市ですから能力者ですよ」

「退いてください」

「退く？　おかしなことを言いますね。ここは学園都市能力者たちの街です。ですから僕が退くのではなくあなたたち魔術師が去るんですよ」

（今ならどうとでも倒せるけど、ステイル・マグヌス？　面倒だか

らあってるのを前提にしよう。ステイルと違って気絶するほどの衝撃を与えるぐらい上空に飛ばしたら体制を立て直すだろうし、頭上に何かを転移させても避けるだろうし、かといって直接体内に何かを転移させるとインデックスのなんでしたっけ？　まあ上条が幻想殺しを使った後で負傷してたから失敗じゃシャレにならないし、てかその前にこの人は攻撃しようとしたら気づきそうだし）

「そうですか、仕方がありません」

神裂がそう言い刀の柄に触れようとした瞬間結標が能力で自分の手元に転移させた。

「！？」

「これは危ないので預かりますね」

「・・・・・刀がなくなれば戦闘ができないとお思いですか？」

言うと神裂は結標に接近してきた。

（まだ、頭に血が上ってたか！？）

そんなことを考えながらも神裂の後ろに転移して奪った刀を思いっきり振るった。が――

「甘い」

――簡単に防がれてしまった。しかし防がれた瞬間結標はまた転移し距離をとった。

「空間移動能力、というものですか」

「ええ」

結標の能力を理解した神裂は慎重に結標の姿を捕捉していた。
「少々、お話をしましょうか」
「・・・・・・・」
黙っている神裂に構わず結標は話を続けるが両者ともに相手に意識を集中していた。
「完全記憶能力で残り１５パーセントでしたっけ？　けどおかしいと思いませんか？　完全記憶能力、別に彼女が初めてというわけでもないでしょう。なのに１５パーセントで一年しか持たないなら大体七年しか生きられません。しかし脳がパンクして死んだなんて事例はありません」
「・・・・・・」
「そもそも人の記憶とは一つではありません。言葉や知識を司る意味記憶、運動などの慣れを司る手続記憶、そして思い出を司るエピソード記憶、こんな具合にいろいろあるんですよ」
「・・・・・・だからどうしたというのですか？」
「つまり、それぞれ入れ物が違うんですよ。たとえ意味記憶の器が満杯になってこれ以上覚えられなくなってもエピソード記憶の器に影響が出るなんて脳医学上絶対にありえないんですよ」
「！？」
「隙あり」
神裂が動揺した瞬間に背後に転移し後頭部を思いっきり殴りつけた。
「くっ」
完全に動揺して警戒がとけていた。神裂は地面に倒れこんでしま

ったが、すぐに体制を立てなおそうとしたができなかった。なぜならワインのコルク抜きなどで服を地面に縫い付けられていたからだ。

「こんなもの」

こんなもの、事実聖人である神裂には時間稼ぎにしかならないだろう。しかし結標にはそれでよかったもうすでに時間は十分稼いだのだから、

「それではまた会いましょう。そうそう先ほど言ったことはすべて真実ですよ。よく考えてくださいね。あなたのいる組織は十万三千冊の魔導書に首輪も付けない組織なのですか？　下の者に真実をすべて教えてくれる組織なのですか？　よく、考えてみてくださいね」

そう言い残すと結標は空間移動能力でその場を後にした。
残された神裂は言われたことで科学的にはインデックスの記憶のことがありえないことや、言われてみたら組織が十万三千冊の魔導書に何も仕掛けを施さないはずがないということに気がついて、混乱していた。ただわかっていることを口にした。

「・・・・・・私の七天七刀」

「あ、この刀返すの忘れてた」

とある科学の結標淡希？　第六話（後書き）

いつも通りの駄文ですいませんでした。
ほとんど神裂と戦闘がありませんでしたね。
いきなりで申し訳ありませんがアンケートです。
上条の記憶は残したほうがよいでしょうか？　原作通り消したほうがよろしいでしょうか？

とある科学の結標淡希？　設定（前書き）

どうもＳｕｎです。投稿出来ないといって起きながら投稿です。
理由は祖父の一周忌なのですが明日なのにすでに祖父の実家のある県にいて暇だったからです。まあ投稿は設定だけなんですけど、また後書きにお知らせとアンケートがあります。

とある科学の結標淡希？　設定

【名前】

結標淡希

【容姿】

原作の結標淡希と同じただし男で（隠れ設定で目の色が違う）、

【能力】

レベル５　第三位　座標移動

一度に飛ばせる距離は２０００メートル、最大重量は１１３００キログラムただし２５００キログラム以上は身体に負担がかかる。原作の結標淡希よりも強力になっている（２．５倍）。
能力で御坂美琴を真似て自動転移というものを作った。

自動転移：自身のＡＩＴ力場無いに入ったものを自動で遠くに転移させる。そのため知り合いだろうが、味方だろうが転移（１０００メートル以上先）させ、なおかつランダムに転移させるため相手を殺す場合があるので使用していない。【備考】

憑依か転生かよくわからない状態の主人公。
真実は生まれる前（赤ん坊どころか人の形をするよりも前）の結標淡希に憑依転生した。

普通の憑依とは違い意思を乗っ取たりしたのではなくあくまで転生だが憑依ともいえるし転生ともいえるので憑依転生とする。
男になったのは転生が人の形をする前なので性別が変動した。
記憶に関してはあくまで前の記憶を思い出しただけ、
演算能力が一方通行並にある。また樹形図の設計者で能力の演算を最適化しているので原作よりも能力が高く、他の空間能力者と違い瞬時に能力使用が出来る。
憑依転生をしたためある意味存在が神秘だから魔術に耐性がある（そのため人払いなどの魔術が利きにくい、また耐性と共に能力者になる前は適性もあったので能力者で無く魔術師でも一流になれた（どうでもいいし後の祭り））

とある科学の結標淡希？　設定（後書き）

上条さんですが記憶を失うことにきめました。

お知らせです。

このお話の始めの部分を変えることにするかも知れません。理由は主人公にもう少し学園都市の闇に関わって貰うためです。

アンケートとです。　吸血殺し編に介入させるかどうかです。

またヒロインをどうするかです。

一応妹達のなかからを予定していますが他にありましたらご意見ください。

よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1642l/

とある科学の結標淡希？

2011年8月1日14時08分発行